

## なぜ今、エージェント法か—個人の役割と倫理を考える

盛田 常夫

ジュルチャーニイ政府はエージェント法（諜報部員にかんする内務省機密資料の開示法）の制定に動き出した。これまで社会党は旧体制時代の諜報部員にかんする資料の公開を、国家機密保持と社会の安定性維持という論理から拒否する姿勢を貫いてきた。すでに体制転換が始まって15年以上も経過し、旧体制の残滓は次第に歴史的事実へとフェイドアウトしつつある。オルバン政権がこの問題に決着を付けなかったのも、すでに時間の経過が問題の半分以上を解決してしまったと考えたからだろう。

ところが、ジュルチャーニイ政権は原則公開の法律を制定することを決断した。なぜ今、エージェント法なのか。その意味を考えてみたい。

### やぶ蛇

政権を奪取して、イデオロギー闘争を止めたかに見えたFIDESZが、2002年の総選挙を闘う武器に反共産主義キャンペーンを選択した。

「今さら反共産主義でもあるまい」と思った人は多いが、FIDESZは古典的なイデオロギー闘争を軸に、若者を駆り立てる選挙方針を立てた。選挙敗北後は、首相に選任されたメツジェシの諜報部員としての過去を暴き、これを糾弾することを最初の政治闘争に設定した。

ところが、この政治方針は逆にFIDESZ連合を突き崩す諸刃の刃になった。政治的な公職にある者の諜報員としての履歴を調べる委員会が入手したデータから、与党側よりも野党側により多くの「適格者」がいることが判明したのだ。さらに、FIDESZの指導者ポコルニイの父親が諜報部員の過去を告白したために、メツジェシ辞任要求の先鋒に立っていたポコルニイ自身が党の要職から退くという思いがけない展開になった。

互いが互いの過去を暴くことで、お互いが傷ついてしまう。体制転換から十年も経過して、

なぜ過去を掘り起こし、傷を舐め合わなければならぬのか。以後、この問題はハンガリー政治のプライオリティを失ってしまった。そのことはまた、旧体制の政治家を抱える社会党にとって、都合の良いことでもあった。

### ジュルチャーニイの攻勢

ところが、ジュルチャーニイが政権に就いて風向きが変わってきた。イデオロギー闘争に汲々とするFIDESZを尻目に、彼は矢継ぎ早に経済改革政策を打ち出している。連立のジュニアパートナーが要求していた所得税の切り下げを受け入れただけでなく、租税制度全体の見直しを命じ、VATや所得税、さらには地方事業税の引下げ検討を開始し、イデオロギー闘争に埋没するFIDESZを常に政策的に一步先んじる先手を打ってきた。今後予定されるEU補助金の戦略的計画立案にかんする四党首脳会談を提起し、オルバンを引き込むイニシアティブも握った。明らかに、FIDESZはジュルチャーニイの政策攻勢に押されている。そこにエージェント法の提起である。

世代交代を終えた社会党指導部にとって、もうエージェント法によって暴露されて困ることはない。逆に、党内部に残っている旧体制の政治家を最終的に一掃する手段にもなるから、一石二鳥だ。FIDESZも制定できなかった法律を提唱し、FIDESZがそれを追認する。明らかに攻守の転換が始まっている。

加えて、カポシュヴァール市のFIDESZのスイタ市長が、諜報部員だったという情報がインターネットで流れた。スイタ市長は、そういう証拠があるなら出して貰いたいと頑なに否定するが、彼がクラクス・ピーテルというニックネームの諜報部員だったという内務省資料が見つかった。本来はこの問題で攻勢をかけるはずのFIDESZが、逆に攻勢をかけられている。

## ハンガリーの特殊性

旧東独では国民の三人に一人が諜報部員の役割を負わされていた。家族、兄弟、同僚が互いに動向を秘密警察に報告する。人々が疑心暗鬼に生活する閉塞社会が形成された。もっとも、これだけ諜報部員の数が多ければ、情報管理は事実上、不可能だろう。だから、秘密警察の方は都合の良い情報だけをピックアップして、気に入らない人物を隔離するのに使ったと推測される。こうやって秘密警察の恣意的な言いがかりで、多くの悲劇が生まれた。東独の監視体制はナチスの監視体制そのものだった。

今の北朝鮮にも同じような相互監視体制が機能しているだろう。日本もまた、戦前の軍国主義時代は隣組で相互監視のシステムを作り、戦争に反対する勢力を徹底的に弾圧した。日本社会には今でも、お上に告げ口するという習慣は根強く残っている。

さて、旧体制の締め付けが強かった東独やチェコスロバキアでは、体制転換を契機に、旧体制の諜報活動を担っていた人物が公職から排除された（日本の戦後処理においても、戦犯の公職追放が行われている。もっとも、日本の場合は、アメリカの占領政策の転換で、きわめて中途半端になってしまったが）。

ところが、ハンガリーではハンガリー労働者党改革派が体制転換を主導し、平和的な転換をおこなったために、旧体制の影の部分は断罪されることなく放置されてきた。逆に、体制転換の過渡期を混乱なく進めるために、諜報部員の名簿や報告の公開が禁止された。このため、情報公開の問題は事ある度に政治的課題として提起されたが、常に社会党がブレーキをかけ、実現には至らなかった。ところが、ジュルチャーニィが首相になって、そのブレーキが外れた。

## 社会変動における個人の役割

体制転換のような社会変動において、個人はどのような役割を担うのだろうか。社会変動は自然界の淘汰に類似している。新しい種が古い種を滅ぼすことで、世代交代が達成される。人

体の細胞でも、古い細胞が破壊され、新しい細胞が生成されることで、新陳代謝が図られる。

現代の細胞生理学では、細胞死は二通りあると考えられている。一つはアポトーシスと呼ばれる代謝プロセスで、細胞が自死することで新たな細胞を生み出すという正常な新陳代謝である。もう一つはネクローシスと呼ばれる細胞破壊である。外的な衝撃で傷ついた細胞は破壊され、新たな細胞を生成できない状態を言う。

このアナロジーでいくと、ハンガリーの体制転換はアポトーシス的な過程だと見ることがができる。古い細胞の自死と新しい細胞の生成が共存するプロセスに類似している。これにたいして、旧ソ連諸国の体制は古い体制から新しい体制へ移行できる要素がなく、古い体制の崩壊とともに、全体のシステムが機能麻痺に陥るといふネクローシス的な過程を辿っている。

このような社会変動の中で、個々人はどのような役割を担っているのだろうか。

自然界の淘汰と社会の変動には類似点と相違点がある。社会の変動に際して、旧体制の統治者やその一族が抹殺されることは歴史上、数多く観察される。現代でも、ナチスドイツの民族浄化、カンボジアのポルポト一派による民族虐殺は極端な事例であるが、社会変動の一つの特徴を示している。しかし、このように人間そのものを抹殺したのでは社会を維持することができなくなる。こうした野蛮な社会変動は、社会のネクローシスをもたらすからである。議会制民主主義が導入されるまでは、人類は社会変革における野蛮な手法でしか、社会変動を実行することができなかった。

現代では、旧体制を支えた個人を抹殺するのではなく、個人が果たす役割と機能を変えることで、社会変動が達成される。ここが自然界の淘汰と違う点だ。旧体制の支えてきた人は自死する必要はないし、抹殺という野蛮な方法で葬られる必要もない。社会を担う人々の役割と機能を変えることで、社会の変動が達成される。野蛮な抹殺から役割交代へと社会変革の手段が変わることで、人間の文明も進歩してきた。こ

の面から言えば、いまだ暗殺手段が幅を効かせているロシアなどは、前近代を彷徨っていると言えよう。

## 個人の役割の倫理性

さて、現代の社会変動が個人の役割と機能の転換によってもたらされることを容認した場合、旧体制で担った役割や機能への責任をどこまで負うことができるのだろうか。同じ一人の人間が、社会システムが大きく変動した新体制でも、旧体制と同様に権力を行使する役割を得た場合、その行動を規制する倫理性がどこまで問われるのだろうか。

メッジェシのケースはきわめてハンガリー的だ。旧体制と新体制の両方で大蔵大臣を務め、新体制の首相にまで上り詰めた。彼は旧体制で諜報部員の仕事も請け負っていた。もっとも、諜報部員には二通りあって、いわば国家機密の擁護や国家利益の推進の立場から権力の意思を秘密裏に行使する諜報活動（国家機密スパイ）と、職場・地域・家族や友人の思想・行動を監視し、これを秘密警察に報告する諜報活動（監視スパイ）がある。メッジェシは前者の国家機密活動に携わっており、監視諜報活動に携わっていないから、何ら恥じることはないと反論したが、多分、これは彼が大蔵省に入省し、主要なポストに就いてからの話だろう。それ以前のもっと若い時代の諜報部員の活動は、周囲の監視活動だったと推測される。

この点で参考になるのが、バチカイ・タマーシュの告白である。旧体制で国立銀行総裁まで上り詰めたバチカイ・タマーシュは、1957年から1968年まで、家族・友人の動向を通報する諜報部員であったことを告白した。彼の妹や縁者がナジ・イムレとともにルーマニア送りになったが、廻りの者が彼に同情を寄せていた最中にも、身内の動向を秘密警察に通報していた。1968年以後は、高いポストに就いたために、諜報活動から免除され、以後、通報活動をおこなう必要がなくなったという。バチカイはそのことを最近になって告白した。すでに隠居の身に

あるバチカイを告白に駆り立てたものは、人としての良心であり、倫理性だろう。

現国立銀行総裁のヤーライも諜報部員だったことが知られている。彼も大蔵省の国家機密を守る役割を負っていたとされ、メッジェシと同様に、倫理性を問われていない。時の権力に仕えるのが官僚の仕事だから、良心や倫理性が問われないのだろうか。少なくとも、生きることの意味が問われる問題であることは間違いない。

## 倫理性は社会の質を規定する

旧体制で政治的エリートだった個人が、新体制でも政治的エリートであることは、いかに官僚だったからとはいえ、倫理性に反しないだろうか。少なくとも、人間としての信頼性の問題が問われている。

これとは対照的に、旧体制で秘密警察の諜報部員の役割を果たし、多くの友人・知人を売り渡した人物が、社会的制裁を受けることなく、社会の指導的地位にとどまり続けることは、明らかに社会的倫理に反するだろう。今、エージェント法が制定され、諜報部員の資料が公開されることで、旧体制のエージェントは社会的制裁を待つことになる。FIDESZは旧エージェントの公職追放を要求しているが、社会党は公開すること以外の制裁を予定していない。

体制転換における責任と倫理性は、戦争責任問題が抱える倫理性と類似している。もちろん、戦争責任は多くの人々を戦地に追いやり、かつ戦地で殺人を実行したことにたいする責任で、殺人を含まない体制転換と同一次元で語ることは間違っている。しかし、実行された社会的行為にたいする責任をどうとるか、その取り方が以後の社会の質を規定するという意味で、共通性をもっている。

責任が明確に問われず、曖昧にされる社会では、社会的行動の倫理性基準もまた低くなる。権力者に倫理性を求めるのが無駄だとはいえ、社会が文明・文化度を増していくためには、より高い倫理性が求められてしかるべきだろう。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）